



《梅樹に蘭図》 文政5年(1822)

立原春沙(1814-55)・立原杏所(1786-1840)画、立原翠軒(1744-1823)賛



《風月三昆圖》 立原春沙 (1814-55) 画、立原杏所 (1786-1840) 画・題



《白梅图扇面》 立原春沙 (1814-55)

3. 立原春沙の三作品：梅樹に蘭図・風月三昆図・白梅図扇面

《梅樹に蘭図》

画：立原春沙・杏所、賛：立原翠軒

紙本墨画淡彩・1幅 129.7×29.8cm 文政5年(1822)

款記・印章：春沙「春沙女」「沙々」朱文円印

杏所「立原任作榎」「任印」朱文壺形印

翠軒の賛と款記・印章：「未報江南信 先開雪裏村 要看花上月 立馬往黄昏

翠軒老人題時年七十九」「立原萬」白文朱文方印「伯時」朱文方印

関防印「比君堂」朱文楕円印

《風月三昆図》

画：立原春沙・杏所

紙本墨画淡彩・1幅 127.0×30.1cm

款記・印章：春沙「春沙女史製蓮花」「沙々」朱文円印「江□女子」朱文変形八角印

杏所「風月三昆圖 杏所野叟作」「立原任印」白文方印「杏所隠士」朱文方印

《白梅図扇面》

画：立原春沙

紙本墨画淡彩・扇面1面 16.6×48.3cm

款記・印章「春沙女史戲筆」「沙(か?)」白文変形印

略伝

立原春沙(1814-55)は、杏所(1785-1840¹)の娘、翠軒(1744-1823)の孫として文化11年2月7日江戸で誕生した。

父・杏所も祖父・翠軒も水戸徳川家に仕えた武士で、父は画技にも長じていた。また祖父は天明6年(1786)、水戸藩の彰考館総裁に任命されると、享和3年(1803)に致仕するまで『大日本史』の編纂をはじめ彰考館の充実に力を注いだ。渡辺崋山(1793-1841)が描いた《立原翠軒像稿》(個人蔵)には、武士でありかつ水戸藩を代表する学者でもあった老翠軒の矍鑠とした姿が描き出されている。文化9年(1812)28歳の杏所は江戸小石川の藩邸勤務を命じられ、父母とともに江戸へ移り住むこととなった²。春沙の妹・辰子の息・友部鉄軒が著した『立原両先生』³によると、その地で朝比奈内匠(詳細不明)の世話で、杏所は尾張様御使番勤の山崎又三郎(詳細不明)の妹・やす(1790-1866)⁴と結婚し、文化11年に初の子どもとして春沙が誕生した。春の日に誕生した故に当座「はる」と名付けたと祖父・翠軒は語っている⁵。後に栗と改名し、字を沙々、春沙と号した。天保7年(1836)版『江戸現在廣益諸家人名録』には、杏所と春沙の住所を「小石川御門外」と記しているので、江戸に出て以来、杏所らは小石川の水戸徳川家上屋敷付近に住んでいたものと思われる。春沙はこうした厳格な武家の家の娘として育てられた。なお、次女も竹沙(1817-47)と号して、和歌や書画に秀でていたらしい⁶。

春沙は幼い頃から杏所より画技の手ほどきを受けていたことは、《梅樹に蘭図》(図版Ⅲ)からも窺うことができる。しかしながら、次に《梅樹に蘭図》の項で述べるように、家庭内での学習は墨画の四君子画などの初歩的なものであったと思われる。娘の絵の教育は後輩の渡辺崋山に託され、10代半ばの春沙は父の勧めで崋山門に入ったと伝えられている。天保元年から2年正月(1830-31、17-18歳)にかけて描いた《粉本画卷》(茨城県立歴史館蔵)からは、古画の摸写や実物写生に真摯に取り組む春沙の姿が窺われる。ただ、父の杏所

は山水画・花鳥画・人物画から真景図まで幅広いジャンルと画法に熟達していたが⁷、春沙は現存する作品から推察する限り、得意としたのは花鳥画であった。特に当時の江戸で同じく崑山門下の椿椿山(1801-54)からも描いた、中国・清の文人画家・惲寿平(1633-90)風の花鳥画に傾倒していた。さらに漢詩や漢文の素養を身に付けていたことも、後に絵に加えられた賛などから窺うことが出来る⁸。また月琴の名手でもあったらしい⁹。月琴とは江戸時代に中国から伝来した弦楽器で、特に清楽の「月琴」は阮咸のように胴部が丸い円形状で棹部が短い点を特徴としていて、幕末から明治期ぐらいまで流行した。

相応な教養を身に付けた女性として成長した春沙は、天保10年(1839)26歳の時に、第11代将軍・徳川家斉(1773-1841)の娘で加賀藩主・前田斉泰(1811-84)の正室となった溶姫(1813-68)のもとに御殿女中として仕えることとなる。ちなみに東京本郷の加賀藩上屋敷に建てられた溶姫御殿の正門(御守殿門)が、現在の東京大学の赤門である。文政10年(1827)11月の引移(興入れ)から嘉永3年(1850)までの溶姫附女中の一覧を記した「御住居附諸御役前録」(石川県立図書館蔵)の記事に注目された小松愛子氏は、天保10年12月に「しゅん」から「くり」に改名して「御三之間」勤めを始めた女性こそ春沙その人であろうと推定されている¹⁰。溶姫御殿への出仕に史実の裏付けが初めて得られたことは貴重である。春沙は絵画の御用を受けることもあったらしく、御殿の寝殿に「百鴛鴦図」襖を描いたと伝えられている¹¹。ただ、絵筆を執ることを好んだ溶姫¹²に、現存する作品を見る限り、画技の手ほどきをすることはなかったように思われる。安政2年10月3日病気のため亡くなり、祖父母や父の眠る向丘の海蔵寺に葬られた¹³。

次に、本号掲載の3作品について、若干の新資料も加えながらその概要を述べたい。いずれも未紹介の作品であるだけでなく、これまで紹介されてきた春沙の作品とは性格の異なったものも含まれているので、伝記面も併せて考察することにした。

梅樹に蘭図

祖父・父・春沙の三代の共作という珍しい作品である。「立原任作榎」の款記(挿図1)から父・杏所(任は諱)が梅を描き、次にそれをうまく避けるようにして春沙が蘭を描いた。墨と淡緑色で蘭の葉を描き、そこに墨と代赭(か?)で花を添える。描写は丁寧で、三輪ほど散った花を描くのも珍しい。79歳の祖父・翠軒(諱は万、享和3=1803年の致仕後に翠軒と号した)がおそらく最後に賛を加えたものであろう。翠軒が79歳の年、つまり文政5年(1822)の作とすると、杏所は38歳、春沙はなんと若干9歳であった。父から早くより手ほどきを受けた春沙は早熟の才を披露していた。特に蘭の葉を描く伸びやかな筆の動きは、父の《蘭図》(個人蔵、翠軒賛)¹⁴や次に取り上げる《風月三昆図》(図版IV)に見られる蘭葉の描写に通じていて、幼い春沙が父の教えを必死に守ろうとする様子が窺えて微笑ましい。なお「春沙女」の款記(挿図2)のうち沙の字の第7画目をぐっと伸ばす点にも同様な筆癖が感じられる。

ところで職を辞した翠軒は杏所の作品にたびたび賛をしていた。時には同じく水戸出身の南画家・林十江(1777-1813)の作品に賛を加えることもあった。十江は年少のころに翠軒の塾に入り、9歳年下の杏所に初めて絵筆を執ることを教えたと言われている、杏所の絵の師匠のひとりであった¹⁵。そうした十江画に翠軒が賛をした作品のひとつに《蘭図》(個人蔵)¹⁶がある。それは蘭葉を描く息の長い流暢な線描が魅力的な作品である。十江の没年から文化10年以前の作であるこの種の十江画を、文化9年に江戸へ移る以前の杏所が水戸で目にしていただ可能性は高い。杏所から春沙へと受け継がれたのびやかな線を描く運筆法は、十江画からの示唆であった可能性も考えられる。

水戸の大儒・翠軒の賛は喜ばれたに違いない。それが翠軒着賛の主な理由であったが、同時に未だ若輩であった杏所(翠軒引退時には杏所は19歳)を引き立てる役割も担っていたと推測される。同様な意味で、本作も孫・春沙そして杏所にとっては娘・春沙のお披露目を寿ぐ作として生み出されたのではないだろうか。さらにもう一点、翠軒賛の春沙画《蘭竹図》(個人蔵、挿図3)がある。翠軒の没年(文政6=1823年)から本作と近い時期の作品とみて間違いない。翠軒は初孫・春沙の画才を慈しんでいたのだろう。2作とも線描を主体

とした四君子画である。若年の春沙がまず手始めに杏所から学んだのは、こうした四君子画であったと思われる。春沙がより本格的な着彩の花鳥画を学ぶのは渡辺崋山のもとであった。

なお、杏所画の「く」の字形に曲がる梅の幹は、文政8年(1825)の《三清之図》(個人蔵)¹⁷に近く、この時期の杏所の好みであったらしい。翠軒の賛は金の李俊民(1260没)の「詠梅」の五言絶句である。

風月三昆虫

春沙の款記「春沙女史製蓮花」(挿図4)から、着色の蓮を春沙が、水墨の蘭と菊を杏所が描いたものと判明する。前述の《梅樹に蘭図》とは逆に、春沙の蓮のほうが先に描かれたらしい。花卉は肉太のゆったりとした淡墨線で輪郭をとり、胡粉を塗った上にわずかに部分的に朱を入れている。花の中央部分には花托(淡青)と雄蕊(胡粉)が描かれているが、雄蕊の位置にはやや不自然な点も見られる。葉裏と花柄は淡い青で、葉表はそれよりやや濃い青色の没骨画法で描かれ、葉脈と花柄の小突起が各部分の青よりやや濃いめの青で加えられる。

春沙の蓮は幕末期の江戸で渡辺崋山周辺の人々が好んで描いた憚寿平風の花鳥画法におおむね則ったものといえるが、同じく憚寿平風の蓮を描く《扇面花図》(世田谷区立郷土資料館蔵、挿図5)とは描写がかなり異なっている。葉や花の描写が椿椿山の《雑花果蓀図》(東京国立博物館蔵)に出てくる蓮に近く、流行の憚寿平風の習得に安定感がある《扇面花図》に対して、本図(挿図6)では裏返った葉や花の成形にやや拙さが見られる。ただ描写はとても丁寧で、丹念に引かれた葉脈(ただし写生の点ではやや難点もある)の軌跡やふっくらとした花卉の風情、あるいは清澄な色感には、初々しくも優しい眼差しが感じられる。年代推定となる指標を欠くが、まだ習熟しきっていない描写の様態から崋山門に入ってあまり時が経っていないころの作としておきたい。

風月三昆虫とは蓮、菊、蘭の三種を描く画題で、数字にちなんだ画題を集めた大原東野(1771-1840)編『名数画譜』(1810年刊)にも一図(挿図7)が載っている。金井紫雲『東洋画題綜覧』(復刻版は国書刊行会、1997年)には中国の清代にいた孟蘭、仲蓮、季菊の三兄弟の名に因んだもので、仲のよい兄弟という意味とある。

白梅図扇面(図版V)

背景にうすく藍を刷き、画面上端から白梅の枝を垂下させ、枝の一部を水中に沈める、いわゆる「水潜りの梅」の構図である。「春沙女史戯筆」の款記(挿図8)はこの洒落た図柄を意識しての表現とも受け取れるが、同じく扇面の《花鳥図扇面》(個人蔵)に「春沙女史戯作」という款記(挿図9)がみられるので、席画的な趣向、あるいは贈答用を意識したものとも考えられる。画面には折り目があり、かつて扇面に仕立てられていた時期があったことを示している。

梅樹の屈曲する枝振りは、先の《梅樹に蘭図》の杏所画に似通っており、特に太い枝の屈曲部分を瘤のように膨らませる(時には「うろ」まで描く)のは父譲りのやり方である。款記の書体は同印を捺す《百子留芳図扇面》(愛知・田原市博物館蔵)¹⁸のそれ(特に春・女・史の字、挿図10)に近い。制作年代は不明ながら、手慣れた作風から今回紹介した3作品の中ではもっとも遅い時期の作ではないかと思われる。なお、現在この扇面は、他の色紙など22図とともに六曲一隻の中屏風に貼付されている。おそらく好事家のひとりが気に入った作品をアトランダムに貼ったものと思われる。

なお参考までに現在知られている春沙画を款記(【 】)と印章とともに記す。重複使用のある印章はアルファベットで記した(A:「沙々」朱文円印、B:「江□女子」朱文変形八角印、C:「不明」白文変形印、D:「冰蓮」朱文方印)。AとBが早くより使われていた印章と思われ、CとDが比較的後年から使われ始めたのではないかと予想される。

《梅樹に蘭図》翠軒賛（実践女子大学香雪記念資料館蔵、図版Ⅲ）紙本墨画淡彩【春沙女】A、文政5年（1822）
 《蘭竹図》翠軒賛（個人蔵、挿図3）紙本淡彩【春沙女寫】B、文政6年（1823）以前
 《熟稻図》¹⁹ 自賛（個人蔵）紙本淡彩【春沙女寫】「春沙」朱文方印
 《野菊図》²⁰（愛知・田原市博物館蔵）絹本着色【春沙女】「立原氏（か？）」朱文方印
 《破蓮空蟬図》²¹（茨城県立歴史館蔵）紙本淡彩【春沙女史】A
 《風月三昆図》（実践女子大学香雪記念資料館蔵、図版Ⅳ）紙本墨画淡彩【春沙女史製蓮花】A・B
 《梅竹図》自賛（個人蔵、挿図11） 紙本着色 【春沙女史】A・B
 《扇面花図》²²自賛（世田谷区立郷土資料館蔵）紙本着色【春沙女史】A
 《百子留芳図扇面》（愛知・田原市博物館蔵）紙本淡彩【春沙女史】C
 《白梅図扇面》（実践女子大学香雪記念資料館蔵、図版Ⅴ）紙本墨画淡彩【春沙女史戯筆】C
 《菊花図》²³自賛（茨城県立歴史館蔵）絹本着色【立原氏女春沙詩畫】C・A
 《花鳥図扇面》（個人蔵、挿図12）紙本淡彩【春沙女史戯作】「立原春印」朱文方印・D
 《遊小魚図》²⁴（東京・出光美術館蔵）【春沙女史戯作】D

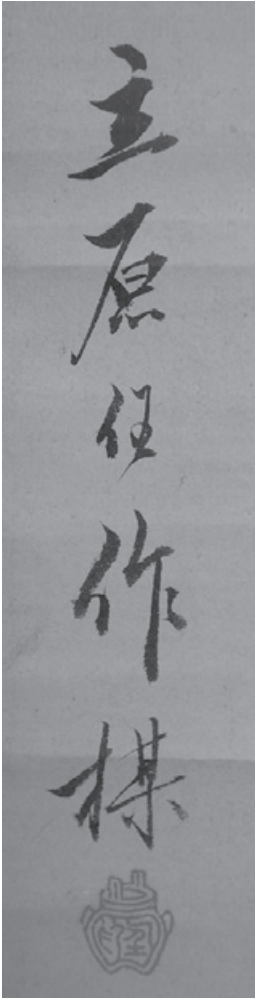
（実践女子大学香雪記念資料館 館長 仲町 啓子）

註

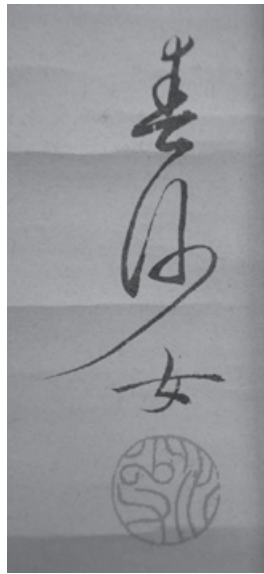
- 1 杏所が生まれた「天明5年12月26日」を正確にグレゴリオ暦に直すと「1786年1月25日」となるが、杏所論の多くが生年を1785年としているので、ここでもそれに従った。
- 2 横瀬貞輯『近世名家碑文集 完』（経済雑誌社、1893年）所収「立原杏所墓碑銘」。
- 3 『立原両先生』は友部新吉発行、1915年。
- 4 生没年は、白井光弘「立原両先生—立原杏所遺稿—（杏所とその娘たち）」（『郷土文化』第44号、2003年）による。
- 5 春沙の生年月日と命名に関しては、註3の同書に拠った。
- 6 柴桂子『江戸期おんな表現者事典』（現代書館、2015年）の茨城県の和子の項。
- 7 『立原杏所とその師友』（茨城県立歴史館、2010年）には、杏所の花鳥画・山水画・真景図が多く紹介されている。人物画としては《東照神君図》（河野元昭「立原杏所筆 東照神君図」『国華』940号、1971年）がある。
- 8 木下はるか「立原春沙筆「秋弁野鶏図」について」（世田谷区立郷土資料館編『荻泉翁コレクション 一藝に遊ぶ—』2009年）では、《秋弁野鶏図》に春沙自らが加えた賛の原詩が、元の程鉅夫の五言絶句であることが説かれている。
- 9 註2の碑文による。
- 10 小松愛子「溶姫の引移り婚礼」（堀内秀樹・西秋良宏編『赤門—溶姫御殿から東京大学へ』所収、東京大学出版会、2017年）。
- 11 註2の碑文による。
- 12 本館にも《旭日寿老像》を所蔵している。また註10の同書には七点の図版が掲載され、木下はるか「溶姫の絵画稽古」の論文が掲載されている。さらに同氏の「將軍姫君の絵画稽古と御絵師の役割—將軍権威表出の一側面—」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第4分冊』56号、2010年）。同「將軍家「奥」における絵画稽古と御筆画の贈答」（『歴史評論』747号、2012年）。
- 13 註4の同書によると、春沙の墓石の風化が甚だしいため、水戸の立原家の墓地に1986年新たに墓碑が建造され、碑陰が紹介されている。
- 14 註7のカタログ2図。
- 15 小川知二「林十江、立原杏所とその作品」（茨城県歴史館編『水戸の南画—林十江・立原杏所とその周辺—』、1978年）。
- 16 註7のカタログ15図。
- 17 註7のカタログの72図。
- 18 註7のカタログの127図。
- 19 註7のカタログの123図。
- 20 註7のカタログの125図。
- 21 註7のカタログの124図。
- 22 註7のカタログの126図。
- 23 註7のカタログの122図。
- 24 出光佐千子「立原杏所筆「雪月花」と北越紀行」（『出光美術館研究紀要』16号、2011年）、出光佐千子「館蔵品紹介 立原杏所筆『七絶詩』・春沙筆『遊小魚図』の鑑賞—南宋の文人・陸游に擬えて」（『出光美術館館報』157号、2012年）。

図版典拠

挿図5と10は『立原杏所とその師友』（茨城県立歴史館、2010年）より複写・転載。



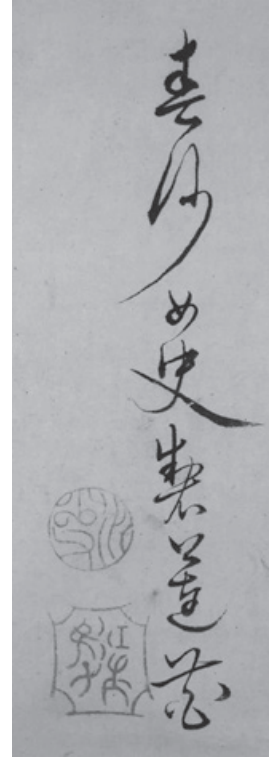
挿図1 《梅樹に蘭図》の
杏所の款記



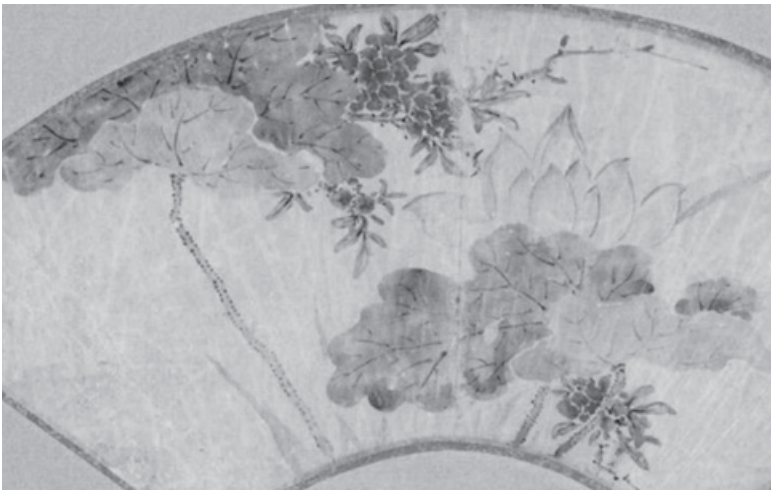
挿図2 《梅樹に蘭図》の
春沙の款記



挿図3 春沙《蘭竹図》
(個人蔵)



挿図4 《風月三昆虫図》の
春沙の款記



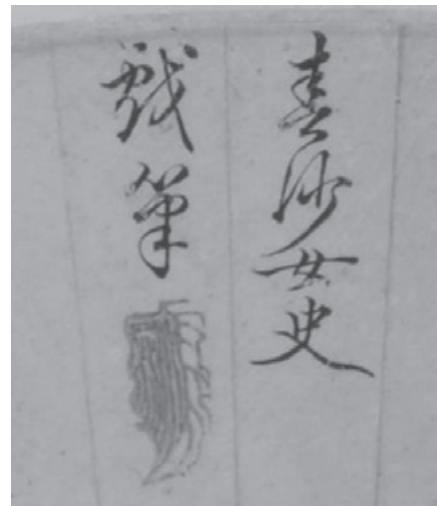
挿図5 春沙《扇面花園》(世田谷区立郷土資料館蔵)部分



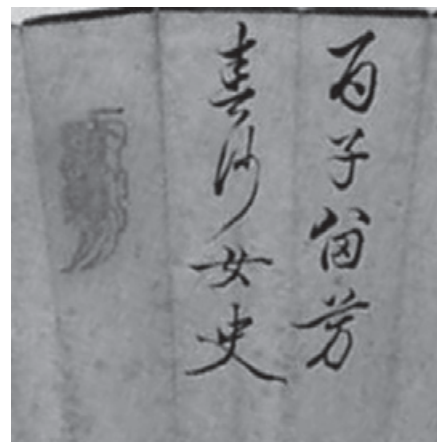
挿図6 《風月三昆虫図》部分



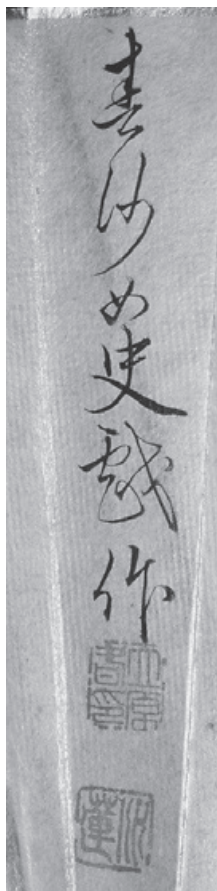
挿図7 『名数画譜』の風月三昆図



挿図8 《白梅図扇面》の款記



挿図10 春沙《百子留芳図扇面》
(愛知・田原市博物館蔵)の款記



挿図9 春沙《花鳥図扇面》
(個人蔵)の款記



挿図11 春沙《梅竹図》
(個人蔵)



挿図12 春沙《花鳥図扇面》(個人蔵)